

日蓮における一闡提成仏と仏性

——爾前無得道論を中心にして——

関 戸 堯 海

(身延山大学)

一 はじめに

日蓮は『観心本尊抄』に「一念三千を識らざる者には、仏大慈悲を起して、五字の内にこの珠をつつみ、末代幼稚の頸に懸けさしめたもう」(定本七二〇頁・真蹟現存)と、末法の凡夫を「末代幼稚」とし、また『南條兵衛七郎殿御書』に「十悪は日々にをかし、五逆をばおかさざれども五逆に似たる罪又日々におかす。又十悪・五逆にすぎたる謗法は人毎にこれあり」(定本三二二頁・断簡現存)と日本国中のすべての人々が謗法の重罪に陥ってしまっているとする。すなわち、末法の凡夫こそ五逆・謗法・一闡提に等しい最も救われがたい存在であるとみて、『涅槃經』の一闡提成仏思想などを論拠としつつ、『法華經』の題目による末法の衆生救済の宗教を確立していった。

そして、『法華經』提婆達多品の悪人成仏・女人成仏も、最終的には方便品の二乗作仏に集約されるとみる見解は(『開目抄』等参照)、日蓮の修学期から佐渡流罪にいたるまでの、いわゆる佐前期の研究成果によって確立されたとみることができる。

そこで、本稿では、特に爾前無得道論を中心にして、日蓮の佐前期の研究課題を検証することによって、提婆達多や阿闍世王、さらには二乗永不成仏論において悪と規定される声聞と縁覚の成仏を通して、日蓮がいかに末法の凡夫の成仏を見出したかについて考えたい。

二 佐前期における日蓮の研究活動

建治四年（一二七八）の『三沢鈔』に「法門のことはさど（佐渡）の国へながされ候し已前の法門は、ただ仏の爾前の経とをぼしめせ」（定本一四四六―七頁・真蹟影写本）とあって、日蓮みずから佐前佐後の法門の違いを述べており、また一妙院日導は『祖書綱要』「佐前佐後法門異相章」などで、日蓮の教学の佐前と佐後の異相について明らかにしている。このようなことから、日蓮の教学を論じるにあたっては、佐後の教学を中心に論ずべきことが定着しているが、近年では教学の萌芽ともいうべき佐前期の遺文の重要性についても見直されつつある⁽¹⁾。

そこで、日蓮の佐前期の事跡と遺文を検証してみると、その時それぞれに日蓮の研究の課題があることがわかる。

日蓮が出家得度した寺は、比叡山第三代座主円仁再興の安房の清澄寺なので、幼少の頃の学問傾向は、兄弟子の浄顯房・義浄房の指導で、主に天台円教・天台密教・天台念仏を学び、当時流行していた法然の浄土宗の研究も加え、以降二十一歳までの清澄・鎌倉での勉強の成果をまとめたと考えられる仁治三年（一二四二）の『戒体即身成仏義』がある。『戒体即身成仏義』に『法華経』の戒体を述べる中で、法然の浄土宗に言及して、爾前無得道論を展開し、末代鈍根の機に叶うか否かを基準として仏法を選択する方法を否定するが、ここに示されるような法然を論破するための「法然研究」は、『立正安国論』執筆の準備段階にある遺文に、やはり爾前無得道論として提示されており、ま

た他にも女人成仏・一闡提成仏、さらには蒙古国書到来に対処すべきことなど、種々の課題が取り上げられる（本稿末の表参照）。

『戒体即身成仏義』を、清澄・鎌倉での勉強をまとめた成果とすれば、京畿留学中には、新義真言宗の開祖とされる覚鑊の『五輪九字明秘密義釈』を「五帖（条）之坊門富小路。坊門よりは南、富小路よりは西」において書写している。

これらを修学期とすれば、建長五年（一二五三）には『法華経』の題目の宗教の開創を宣言し（立教開宗）、鎌倉で布教を開始するが、正嘉元年（一二五七）に鎌倉大地震を直接体験したのを契機に、天変地異・飢饉・疫病などの続出に苦しむ民衆を惨状から救うべく、改めて仏教の研究をやり直している。それまで日蓮が研究してきた『法華経』を中心とする仏教体系を再構築したものが正元元年（一二五九）の『守護国家論』といえるが、『武蔵殿御消息』に「撰論三卷は給候へども、釈論等の各疏候はざるあひだ事ゆかず候。をなじくは給ひ候て、みあわすべく候」（定八七頁・真蹟曾存）と、無著の『撰大乘論』三巻を届けてもらったが、世親の『撰大乘論釈論』などの釈疏も借りたなどの書簡もあり、この頃の日蓮の研究活動の様子がうかがい知れる。

かつては『守護国家論』が『立正安国論』の下書きであると考えられていたが、『守護国家論』の全体の分量や問答構成などの点から、現在では『立正安国論』執筆の前提となったと位置づけられている。⁽³⁾『守護国家論』の執筆によって、それまでの仏教研究の集大成とした日蓮は、いよいよ『立正安国論』の執筆に取りかかる。

『災難興起由来』『災難対治鈔』は下書きとも言える著述で、『爾前二乗菩薩不作仏事』『十法界明因果鈔』は『立正安国論』の主張を補強するため、念仏批判を主眼とした爾前無得道論・謗法墮獄論などが検討されており、文

応元年五月の『唱法華題目鈔』は「破邪」を中心とする『立正安国論』に対して、「顕正」を主眼とした著述であるとされる。このように、正元元年から『立正安国論』稿了の文応元年にかけての一連の遺文が、『立正安国論』執筆に直接関わる連続的な作業であることが推察できる。

やがて日蓮は松葉谷法難・伊豆流罪を体験し、流罪地の伊豆伊東にあって『顕謗法鈔』を執筆しているが、地獄の様相を論じるにあたって源信の『往生要集』を引用し、また末文では『一乗要決』を背景としつつ『涅槃經』に基づき「信心」「謗法一闡提」の問題を論じている。正嘉元年から文永元年にかけては『一乗要決』要文を何度か筆写している⁽⁴⁾ので、流罪中の不自由な状況にありながら、『立正安国論』に関わる課題を再検討している様子がわかる。

伊豆流罪赦免後、文永元年（一二六四）九月頃に母の病氣見舞いのため故郷を訪れるが、十一月十一日には東条景信らの襲撃をうけている（小松原法難）。その後、文永二年から三年にかけては、『藥王品得意鈔』『法華題目鈔』『善無畏鈔』があり、女性信徒からの問いかけ、あるいは母の臨終に関してか、女人成仏について連続して論じられている。

ところが、文永五年（一二六八）蒙古から国書が到来するや、『立正安国論』で警告していた「他国侵逼難（外国からの侵略）」が的中することになり、にわかに日蓮の身辺は騒がしくなった。このため文永五年から八年にかけての遺文は、鎌倉仏教界を中心とする各方面へ盛んにはたらきかける内容となっており、それまでの仏教学研究的な著述は影をひそめ、日蓮の活発な宗教活動を示す遺文に限られてくる。そして、龍口法難を直前にした七月頃には良観房忍性・然阿良忠・道阿道教らの鎌倉仏教界の代表者との論争の様相を示す『行敏御返事』『行敏訴状御会通』があつて、龍口法難後の『土木殿御返事』『五人土籠御書』『寺泊御書』などは、弾圧の状況報告や、投獄された弟子たちを

気遣う内容となっている。

以上のように、作前期の遺文をみてみると、蒙古国書到来を契機として、日蓮の盛んな布教活動を示す内容に一変するが、それまでは、その時それぞれの課題に即した執筆がなされていることがわかる。そして、『立正安国論』の主張を補強するために「爾前無得道論」が検討されている。

三 爾前無得道論について

『十章抄』に「爾前の円と法華經の円と一つと申す者が、止観を人によませ候えば、但念仏者のごとくにて候なり」「日本国の謗法は爾前の円と法華の円と一つという義の盛んなりしよりこれはじまれり」(定四八八―九〇頁・真蹟現存)とあるように、日蓮は円体無殊の教理こそ比叡山の雜乱化・誹謗正法の根源であるとし、『立正安国論』作成のための三ヶ年の勉強時代に、円体無殊の研究として『爾前二乗菩薩不作仏事』『唱法華題目鈔』を著述している。⁽⁵⁾ また一方で、伊豆流罪中の『顯謗法鈔』では念仏批判を主眼として、地獄の様相と謗法墮獄の問題について『涅槃經』を広範に引用して論じているので、『立正安国論』執筆に関連して行なわれている爾前無得道論の検討は、円体無殊を論じる一方で、念仏批判も念頭にあったと考えられる。

それをよく示しているのが『爾前二乗菩薩不作仏事』における爾前無得道論の検討である。『楞伽經』の二種闡提思想を通して、二乗作仏論と菩薩の成仏を考える姿勢は、『顯謗法鈔』において『涅槃經』の恒河七種衆生の常没一闡提と末法の凡夫の成仏を結びつけて検討している姿勢と同基軸にあると思われる。この点で、念仏批判という視点とともに、末法の凡夫は五逆・謗法に等しい重い罪を犯しているとみる日蓮が、『無量寿經』の法蔵菩薩の第十八願

「唯除五逆誹謗正法」において救済の対象から除外されている五逆・謗法、すなわち末法の凡夫について、『法華経』を信心受持することによって救済されるとみる「唱題成仏論」を確証するために、『法華経』による菩薩の成道を論証することにあつたのではないかと考えられるのである。

そこで『爾前二乗菩薩不作仏事』をみると「二乗永不成仏を説く経で菩薩は成仏できるか」「二乗が成仏しなければ菩薩も成仏しないことの証拠の经文」の二つの問答から構成されており、二乗作仏が許されなければ、菩薩の四弘誓願も満足されないことを前提として、二乗永不成仏を説く爾前の諸経では菩薩の成仏もないことを明らかにする。まず『楞伽経』第二から、⁽⁶⁾

楞伽経第二に云く、大慧、何者か無性乗なる、謂く一闡提成なり。大慧、一闡提とは涅槃性の性なし。何を以ての故に、解脱の中に於て信心を生ぜず涅槃に入らず。大慧、一闡提とは二種あり。何等をか二となす。一には一切の善根を焚焼す。二には一切衆生を憐愍して尽一切衆生界の願をおこす。

（定一四五―六頁・原漢文・真蹟身延曾存）。

等々と引用して、捨善根の闡提と大悲闡提の二種闡提を示して、捨善根の一闡提は諸仏・善智識にあえび善根を生じて涅槃を得ることもあるが、大悲闡提は決して涅槃に入ることはないと説く。日蓮は『楞伽経』に「もし諸の衆生涅槃に入らざれば我もまた涅槃に入らず」とある点に注目して、二乗の成仏を許さない前四味の諸経では、菩薩の成仏もあり得ないとする。そして『華嚴経』から「衆生界尽きざれば我が願もまた尽きず」等とあるのを引用して、⁽⁷⁾

一切の菩薩必ず四弘誓願を発すべし。其の中の衆生無辺誓願度の願これを滿ぜざれば無上菩提誓願証の願もまた成じ難し。之を以て之を案ずるに、四十余年の文二乗に限らば菩薩の願また成じ難きか。（定一四五頁・同前）

と述べ、菩薩の衆生教化の誓願が満足しなければ、仏道成就の誓願も満足しないといふのである。⁽⁸⁾

さらに、第二の問答では、『涅槃經』迦葉菩薩品を引用して⁽⁹⁾

涅槃經三十六に云く、仏性は是れ衆生に有りと信ずと雖も必ず一切皆悉くこれ有らず。是の故に名けて信不具足となすと、^{三十六本、三十二}此の文の如くんば先四味の諸菩薩皆一闡提の人なり。二乗作仏を許さず。二乗の作仏を成ぜざるのみに非ず、はたまた菩薩の作仏も之を許さざるものなり。之を以て之を思うに、四十余年の文二乗作仏を許さざれば菩薩の成仏もまたこれなきものなり。(定一四五頁・同前)

と述べ、『涅槃經』のとおりならば、爾前の諸經の菩薩はすべて一闡提であり、爾前經は二乗の成仏を許さないかぎり、菩薩の成仏もないとする。さらに『一乗要決』で源信がこの『涅槃經』を解釈して「一切衆生悉有仏性というのを少分の一切と固執すれば、經説に違背するばかりか、信心のない一闡提となる。全分の有性であると考えねばならない」と述べるのを引用して、信心と仏性の問題を通して一闡提成仏と爾前無得道論を論じるのは、『顯謗法鈔』と同基軸にある。

『開目抄』で二乗作仏論を主軸として『法華經』と爾前經の相違を論じて、

此に予愚見をもて前四十余年と後八年との相違をかんがへみるに、其相違多しといえども、先ず世間の学者もゆるし、我が身にもさもやとうちをぼうる事は二乗作仏・久遠実成なるべし。(定五四二頁、真蹟身延曾存)

と述べ、また『小乘大乘分別鈔』では、四弘誓願が成就しなければ菩薩の成仏もないのであるから、爾前の諸經では二乗作仏も達成されないとして、

又菩薩と申すは必ず四弘誓願ををこす。第一衆生無辺誓願度の願成就せずば、第四の無上菩提誓願証の願も成就

すべからず。前四味の諸経にては菩薩は仏になるべし。二乗は永く仏になるべからず等云云。

（定七七二頁、真蹟断片現存）

と述べており、『爾前二乗菩薩不作仏事』における検討の延長線上にあることがわかる。

四 おわりに

日蓮は仏教のなかでも極悪人とされる提婆達多を悪と見、また自己の悟りのみを求めて諸經典に成仏を否定され続けてきた二乗をも悪と見て、提婆達多や二乗の成仏を説く『法華経』の救済の世界の普遍性に特に着目した。これは、末法の凡夫を機根が劣った愚かな救いがたい存在と見て、末法の凡夫が救われるためには、諸經典において最も救われ難い存在とされる提婆達多や二乗の成仏が確証され、それに基づいて唱題による成仏を論証することに主眼があったと思われる。

ことには、一切衆生の成仏という菩薩の誓願が満足しなければ、菩薩の成仏もまたあり得ないという視点から、爾前無得道論を展開し、最終的に二乗の成仏が重要な鍵となるとみるのは『爾前二乗菩薩不作仏事』から『顯謗法鈔』『開目抄』へと続けて論じられる重要な課題であることが確認できる。そして、『立正安国論』執筆に際して検討する必要のあった爾前無得道論は、さらに二乗作仏論として検討を重ねられていくのであり、そこには円体無殊についての研究目的があったと同時に、念仏批判のためという側面があったといえる。

注

（1） 小松邦彰「日蓮聖人の初期教学について」（『印度学仏教学研究』一五卷二号所収）等を参照。

- (2) 浅井円道「日蓮聖人の日本天台史観について」(浅井円道選集第二巻『日蓮聖人と天台宗』) 所収参照。
- (3) 小松邦彰「守護国家論の一考察」(『大崎学報』一二五・一二六号) 等を参照。
- (4) 渡辺宝陽「聖人教学における謗法の意義」(同著『日蓮宗信仰論の研究』一〇頁) を参照。
- (5) 浅井円道「日蓮聖人の日本天台史観について」(同著『日蓮聖人と天台宗』) 浅井円道選集第二巻所収) を参照。なお日朝の録外御書や延山録外などの写本で伝えられ、版本としては縮刷遺文にはじめて続集として収録された『二乗作仏事』(正元二年に系けられる) にも、爾前無得道論が展開される。
- (6) 『楞伽經』集一切仏法品(「正蔵」一六卷五二七a)、『一乗要決』大文第四所引。
- (7) 『華嚴經』四十華嚴經 行願品(「正蔵」一〇卷八四七b)。
- (8) 日蓮が『楞伽經』を引用して二種闡提を論じるのは、『一乗要決』大文第四における源信の検討が下敷きになっていると考えられる(拙著『日蓮聖人教学の基礎的研究』二七八頁を参照されたい)。
- (9) 『涅槃經』迦葉菩薩品(「正蔵」一二卷五七五b)、『一乗要決』大文第四所引。

＜日蓮の佐前期の遺文と事跡＞

和暦(西暦) 月日	著作場所等	事跡・遺文等
仁治三(一二四三)	清澄	戒体即身成仏義
建長三(一二五二)	京洛	五輪九字明秘密義積の筆写
〃 五(一二五三)	清澄	立教開宗
〃 六(一二五四)		不動・愛染感見記
正嘉元(一二五五)	鎌倉	鎌倉大地震、この頃天変地異、飢饉、疫病等続出
〃 二(一二五六)	岩本(房州)	一代聖教大意
正元元(一二五九)	鎌倉	武蔵殿御消息
〃	鎌倉	守護国家論
〃		爾前二乗菩薩不作仏事

日蓮における一闡提成仏と仏性(関戸堯海)

正元二（二六〇）	2・	鎌倉	災難興起由来
〃	2・	鎌倉	災難対治鈔
文応元（二六〇）	4・21	鎌倉 （鎌倉）	十法界明因果鈔
〃	5・26	鎌倉	立正安国論の稿了
〃	5・28	鎌倉	唱法華題目鈔
〃	7・16	鎌倉	立正安国論の上呈
〃	8・27	鎌倉	松葉谷法難
弘長元（二六一）	5・12	伊豆伊東	伊豆流罪
〃二（二六一）		伊豆伊東	顯謗法鈔
〃		伊豆伊東	論談敵対御書
〃三（二六三）	2・22	伊豆伊東	伊豆流罪赦免
文永元（二六四）	9頃	安房	母の病氣見舞いに故郷を訪れる
〃	11・11	東条松原	小松原法難
〃	12・13	安房	南條兵衛七郎殿御書
〃二（二六五）		安房	薬王品得意抄
〃三（二六六）	1・6	清澄	法華題目鈔
〃			善無畏鈔
〃五（二六八）	1・	鎌倉	蒙古国書到来
〃		鎌倉	安国論副状
〃	4・5	鎌倉	安国論御勘由来
〃	9・	鎌倉	宿屋入道再御状
〃六（二六九）	3・1	鎌倉 （鎌倉）	御興振御書
〃	3・10		弁殿御消息

